



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 懷徳堂講座講演要旨                                                                           |
| Author(s)    | 作道, 洋太郎; 天野, 文雄; 中村, 孝義 他                                                           |
| Citation     | 懷徳. 1988, 57, p. 97-102                                                             |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/90700">https://hdl.handle.net/11094/90700</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 〈懷徳堂講座講演要旨〉

文化の大バトロンたち——文化投資の今昔

——昭和六十三年春季

## 大阪の企業家と文化振興

作 道 洋太郎

江戸時代において懷徳堂の創設やその運営に鴻池家や住友家など、大坂の豪商による文化投資が見られたことは、よく知られているところである。こうした大坂町人による学術文化の振興は、明治以後においても引き続いておこなわれ、大阪の文化風土の特質を示すものと言いうことができる。

宮本又次氏が『大阪経済人と文化』（昭和五十八年発行）において明らかにしているように、五代友厚らによる大阪商業講習所（現大阪市立大）の設立、永田仁助らの重建懷徳堂の建設、住友春翠による大阪府立図書館・慶沢園・市立美術館用地の寄付、岩本栄之助の大阪市中央公会堂、塩見政次の塩見理化学研究所、竹尾治右衛門の竹尾結核研究所、山口玄洞による山口厚生病院（現在阪大病院の一部）と阪大微生物病研究所の建設資金寄付、伊藤忠兵衛らと阪大産業科学研究所、大原孫三郎と大原社会問題研究所、野村徳七による大阪商科大学（現市大）経済研究所設置資金寄付などは、その代表的事例と見ることができよう。

この春季講座では、そのうち大阪の洋反物商・山口玄洞（文

久三年（昭和十二年）の企業者活動と学術文化への貢献について考えてみることにしたい。仏教に深く帰依していた玄洞翁は「無功德の精神」をもって、伝統のある寺院の再興や、公共施設・教育文化施設等の建設のために一五〇件を超える寄付をおこない、その総額は現在の一〇〇億円にも達するものと見られている。その生涯が現在に語りかけているものは何か、玄洞翁の時代に先駆けた企業家精神とは何なのか。その回答へのアプローチを試みてみたい。

## 能とその保護者

——形成期から現代まで——

天 野 文 雄

現在「古典芸能」として上演されている能と狂言（総称が「能楽」）は、今から六〇〇年以上も昔の鎌倉後期頃に生まれている。もちろん最初から古典芸能だったのではなく、当代の「現代芸能」として誕生したのだが、その古さもさることながら、驚嘆させられるのは成立以来、今日までその芸に重大な（たとえばギリシア悲劇のような）断絶がなかったことである。現在の能は直接的には徳川幕府の式楽として固定化の道を歩み続けた近世の能の影響下にあるが、それでも現在の能の舞台からはなお随所に能が当代の芸能であった中世の名残が認められるのも、長期にわたる稀有の継続性の恩恵なのである。か

くも長く能を継続させたもの、それは偶然も多分に作用しているが、やはり能の魅力とそれを愛好する人々の存在であった。能の愛好者は「熊野」の一節を借りるならば、「老若男女貴賤都鄙」にわたる（特に中世は）が、能の歴史を通じて一貫してその盛衰に大きな影響を与えてきた愛好者は、室町將軍、織豊政権、徳川將軍等を頂点とする武家およびその傘下の武將たちであつた。彼らの多くは能の激烈な愛好者であり、その個人的な嗜好はしばしば「政策」となつて能の歴史を形成してきたのである。能と武家の関わりの歴史はほとんど能そのものの歴史と言えるのであり、今回はその關係を通史的に概観してみようと思う。やや欲ばりすぎで、時間が足りなくなるおそれは十分だが、それによって現代の能の正しい理解に資したい、というのが論者の意図である。

## 作曲家とそのパトロン

——一八世紀ヴィーン古典派の場合——

大阪音楽大学助教授 中村孝義

芸術というものは、人間がその存在の自覚を初めて以来存在するものですが、その存在が一見自立的に見えるときですら、何らかのパトロンエイジによって支えられなければ生きていけないものでありました。音楽も決してその例に漏れません。ところが音楽（家）とそのパトロンとの關係は、保護されるものと

保護者というような、いわゆる幸福な關係にいつもあつたわけではありません。むしろ一八世紀における西洋音楽の世界においては、パトロンは、音楽の新しい展開を阻止しようとする立場にあつたとさえいえるかも知れません。

西洋音楽の世界においては、一八世紀という世紀は極めて重要な意味を担っています。それは単に、バッハやハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン等の重要な作曲家が活躍したということに留まらず、音楽そのものが、時の文化全体のなかで主導的な芸術にまで高められたということなのです。

そしてそうした音楽の持つ主導的な地位は、実は一八世紀という社会的にも大きな変動を経験した時代において、作曲家たちがそのパトロンたちとの様々な葛藤を経て初めて獲得しえた芸術家としての自覚がもたらしたものであつたのです。今回は上に挙げた作曲家たちを中心に、音楽家とそのパトロンの關係を探りながら、一八世紀西洋音楽においてパトロンが果たした役割、並びに一八世紀西洋音楽の持つ意味について考えていきたいと思ひます。

## パトロンとしての

ローマ教皇ユリウス二世

若山映子

一五〇三年に教皇ユリウス二世を名乗ることになる若きジュ

リアーノ・デッラ・ローヴェレは、叔父シクストゥス四世（教皇在位一四七一—一四八四）によって枢機卿に任命され、彼の側近として活躍すると同時に、既に古代彫像の名品や古典文学、キリスト教教父達の著書の収集家としても知られていた。

彼は、ロドリゴ・ボルジャが教皇座を占めた時、新教皇に正面から対立したことで十年間の亡命生活を余儀無くされる。この旧敵アレキサンデル六世（在位一四九二—一五〇三）歿の報にローマに戻った六十歳の彼は、僅か一カ月の在位の後逝去したピウス三世の後継者に選ばれ、激動の十年を送った。

アレキサンデル六世の放埒悪政の結果莫大な負債に喘いでいたローマ教皇庁の財政建て直し、侵略された領土の回復、失墜した権威の再興、そしてイタリアの平和をめざしては軍隊を率いて戦場をも駆け巡ったユリウスは、文化の最大の推進者でもあった。欧州各地の大学設備の拡充と優秀な人材の登用、研究員の確保を実行し、印刷出版の奨励もした。ローマの城壁修理、上下水道の整備、都市計画実現を通してローマに近代都市の外観を与えた。更に、彼の理想と信念の代弁者たり得る芸術家としての資質をプラマンテ・ラッファエッロ、ミケランジェロの内に見抜き、彼らに実力発揮の場を提供したのも彼であった。ユリウス二世との出会いによってこそ彼ら三巨匠は自己啓発に開眼し、眠れる才能を開拓したのである。ここにこそユリウスのパトロンとしての偉大さがあった。

## これからの文化を支えるもの

サントリー文化財団専務理事 佐野善之

優れた芸術文化は古今東西を問わず多くは何らかのパトロンの支援を受け、その結果、発達もしてきた。たとえば、足利義満と世阿弥のように、権力者が芸術家を庇護することは歴史上数多く見られるし、あるいは大阪商人が支えた懷徳堂や適塾のように豪商が文化の発展に寄与するということも少なくなかった。

このように文化のパトロンは伝統的には政治的な権力者、あるいは経済的な富豪が主として担っていた。

ところが、時代の推移により、民主化、大衆化が進行するに従い、巨大な権力を独占する人間が少なくなったり、貧富の差も相対的に小さくなってきた現代においては、文化を資金的に支えるものは、一つには文化行政に、一つには民間の企業や財団活動に、と組織的なものへと姿を変えてきた。

ところで、文化は様々な価値観に基づいた範囲の広いものであって、文化を育てていこうと思えば、必然的にそこに主観的な「判断」が必要となってくる。福祉などの場合と異なり、万遍なく文化を支援していくことが不可能である以上、何が支えるべき文化で何がそうでないかははっきりと誰かが判断しているかねばならないのである。そうであるならば、画一性の呪縛から逃れることができない行政に文化の振興を頼りきることは難

しいのかもしれない。したがって、今後は行政が文化に理解を示すと同時に、様々な民間財団や企業がそれぞれの価値観に基づいて多面的な文化を支援していくことが個性的な文化を發展させる上で重要なものではなからうか。

江戸中後期の文人たち——昭和六十三年秋季

## 詩人六如上人

黒川 洋一

六如は、釈名を慈周とよぶ天台の僧侶である。生まれたのは、今から二百五十余年前、年号でいえば享保一九（一七三四年）のことであり、亡くなったのは享和一（一八一〇）年、六十八歳のときである。生地は今の滋賀県近江八幡市であるが、十一歳のときに家を離れて比叡山で剃髪している。師は慈門という人で、六如は師に従って武蔵国川越の喜多院、叡山善光寺、江戸寛永寺に移り住んでいるが、三十四歳のころ、宗門の争いに巻き込まれ、師とともに寛永寺より退去を命ぜられて京都に移り、洛東の真葛原に六如庵を営んでいる。六如という号はその庵名によるものごとくである。ほどなく天台の律制がもとに復したのに伴い、再び東下して寛永寺にもどり、さらに浅草寺に移ったのち、西帰して近江柏原の成菩提院の院主を勤めている。五十六歳のときに京都の愛宕山白雪山寺勝地院

（現在は廃寺）の院主となり、それから六十八歳で世を終わるまでの十二年間を、主としてその下院である嵯峨長床坊無着庵で送っている。この最後の十二年間が詩人としての六如の円熟期であり、その秀作の多くはこの時期に生まれている。この夏、わたしは六如がその晩年を送った長床坊無着庵の跡を探して嵯峨野を歩き、偶然にその跡と六如の墓碣を発見した。そのことを中心にして、ありし日の詩人の俤を話してみたいと考える。

## 懷徳堂の文人——中井履軒を中心に——

山中 浩之

懷徳堂は学問・教育の府であった。それは大坂に生活する町人を主な対象とした。石庵・翫庵・竹山らは学主や預り人としてそういう町人に教育を行うとともに、町や奉行所との交渉もその活動の大きな部分を占めていた。懷徳堂の学者たちにとって、世俗を離れては、その教育運営はありえなかったといってもよい。

ところが、懷徳堂に生れ育ちながら、そこをあえて離れた人間がいる。それは竹山の弟、中井履軒である。履軒は「幽人」と号し、市中に隠れ住んで、別に私塾水哉館を営んだ。しかも水哉館は、大坂市中を転々と移居した借屋住まいそのものであった。その転々にも関わらず、一貫して流れていたものは学問研究の持続であった。数十年間、三次にわたる改訂を終った研究

は『七経逢原』として大成され、その内容は現在にも継承されている。

しかしそれだけなら履軒はすぐれた学者であったということにならう。そこに特異な諸識性と遊びにみちた批判的精神を付加したのは、履軒がその借屋の居室を「華胥国」と名づけたことであった。「華胥国」とは中国太古の伝説的帝王が夢の中で遊んだというユートピアである。履軒は自ら「華胥国王」と称し、「物くるほしき心」をいだきながら、夢を描き、そして幾多の著述もつむぎ出された。

「華胥国」とは一体何であったのか。またなぜ築かれねばならなかったのか、水哉館主履軒と「華胥国王」履軒はどう関係しているのか。履軒の夢と現実を探ってみたい。

## 頼山陽——大塩中斎との交遊——

頼 祺 一

頼山陽（一七八〇～一八三二）と大塩中斎（一七九三～一八三七）との交遊については、既刊の山陽伝にも中斎伝にも詳しく記されている。

山陽が中斎に初めて会ったのは文政七年（一八二四）三月のこと、時に山陽は四十五歳、中斎は三十二歳であった。以後天保三年の山陽没年まで、兩人の間では文人として学者としてさまざまな興味ある交遊があった。山陽は中斎を「小陽明」と称し、中斎は山陽が「胆」にして「識」があるのをよしとし

た。

『洗心洞劄記附録抄』には、山陽の「奉送大塩君子起適尾張序」の文一篇と六首の詩が収録されており、その間の事情は中斎の「入刻亡友頼山陽之序与詩於劄記附録自記」に述べられている。

今回は、山陽が中斎から趙子璧の「蘆雁図」を贈られた件、山陽が失くした菅茶山遺愛の竹杖を中斎が搜索発見した件など、兩人をめぐる逸話にもとづいて、その交友関係の一端を明らかにしたい。

また、上記「附録抄」中の伏字の問題、とくに「奉送大塩君子起適尾張序」の三分の一以上にもおよぶ伏字の部分について取り上げ、山陽と中斎の社会的立場や意識の相違などを考えてみたい。

## 文人画壇

武 田 恒 夫

文人の画は、中国の明代末期に職業画家の画と区別する上から提唱されはじめた。日本では、江戸時代に入って、新しい唐様絵画として伝えられている。中国の文人と日本のそれとは、身分や生活環境の上で、その間かなりの相違が指摘できる。それは、文人画そのものについても例外ではなかった。

日本における文人画壇は、十八世紀にいたって、ようやく成立することになる。以後、次第にその固有の生活感情に適應し

た文人画を展開させることになった。画壇という用語には、相互交流といった意味合いがこめられている。時代とともにそれぞれの段階で文人画家たちの交友の場が開かれていった。

頼山陽の活躍は、江戸時代も後期に入るが、そのころの文人画壇とも無縁ではなかった。山陽自身多くの著作のかたわら夥しい書幅を遺し、また墨画山水の画幅もかなり手がけていたことが知られている。しかし、本論では、当時の文人画壇の側から、山陽の片鱗にふれてみようと思う。

山陽と交流のあった文人画家として、青木木米や浦上春琴、野呂介石らの名を挙げることもできる。それにもまして、幕末文人画壇の第一人者であった田能村竹田（一七七七～一八三五）との間柄には特筆すべきものがあつた。彼らのふれ合いは、いかにもそれらしいエピソードがひそめられている。かかる交流の証しともなった遺品を取り上げ、理解の便に資したい。

## 懷徳堂と池田の文人たち

肥 田 皓 三

懷徳堂の創建に尽力したいわゆる五同志の一人道明寺屋吉左

衛門（富永芳春）の第三子が摂津池田の荒木家に入り、これがすなわち荒木蘭皐であるが、蘭皐は少年時代から懷徳堂で三宅石庵、中井鋸庵、五井蘭洲の諸先生に教えをうけた縁で、その池田移住以後に、大阪の懷徳堂と池田の土地の頻繁な交渉がはじまることになった。蘭皐の兄が「翁の文」「出定後語」の著者富永仲基、仲基は池田の弟のもとにしばしば来遊した。池田で詠じた仲基の詩は「吳江水韻」に収められている。

荒木家はもともと富裕な酒造家、家産が豊かで文雅を解する家であつた。ことに蘭皐の時代、そして蘭皐の二人の息子の荒木李谿と荒木梅閣の時代は、池田文芸の中心としてこの地の風雅を代表する存在であつた。池田文学の極盛時代は李谿梅閣兄弟によつてもたらされたと「池田人物誌」（吉田鋭雄・稲東猛、大13）に評されている。李谿は詩文はもとより書画を善くし、古楽、蹴鞠を好み、古美術を愛して趣味が広かつた。梅閣も兄に似て好學、書画ともに巧みであつたが殊に書をもつてあらわれた。懷徳堂の中井竹山、中井履軒と親交があり、親戚以上の親密さで交際した。また大阪の混沌社諸友と交わり、葛子琴、頼春水とはとくに仲良しであつた。備後の菅茶山もそうした縁で李谿兄弟をわざわざ池田に訪ねたりした。

当時の逸話のいくつかを掘起し、往時の光景をいくぶんかでも明らかにしたいと思っております。